季刊　連句　第21号

昭和六十三年六月一日発行

季刊連句　第21号　目　次

筑波の道（南柏雑記　19）…… 1

特集　連句鑑賞
鑑賞片言 …… 鈴木春山洞… 2
「市中は」の巻鑑賞（Ⅶ）…… 東　明雅… 4
連句鑑賞の基盤 …… 大畑　健治… 9

付廻し祝賀歌仙　東へ向けて …… 文　杉内　徒司…14
二十韻　東風に …… 文　秋元　正江…16
お礼の言葉　叙勲祝賀会の挨拶 …… 東　明雅…17

「蓑虫」付勝練習二十韻 ……18

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行　第二十五回　猫蓑会 …… 20
第一部　正式俳諧興行　㈠　役割　㈡　次第
二十韻　藤浪や …… 文　原田　千町…21
第二部　二十韻　八巻 …… 22
捌　雑賀　遊・市野沢弘子・高瀬美保・原田千町
中川　哲・本屋良子・東　明雅・式田和子

筑波連句会　二十韻二巻　捌　下鉢清子・秋元正江 ……26
渋谷連句会　二十韻　雪月花　捌　豊田好敏 ……27
逗子連句会　二十韻　沈丁の　捌　本屋良子
『冬の日』の「まゆかき」……佐藤　廣幸…28
雁帛往来・連句会案内 ……29

表紙（昇り龍）　宮　崎　龍火子

筑波の道

南柏雑記 19

雅

筑波大学教授加藤慶二先生の御尽力で筑波連句会が発足した。かねがね筑波で連句会をひらきたいと思っていた私たちの念願が叶ってこんな嬉しいことはない。

もともと、筑波は常磐線の荒川沖で下車して行くのであるが、私の住む南柏から三十余分で到達できる。遠いといえば遠いが、近いと言えばまた近いのである。ここは例の日本武尊の御歌から、連歌発祥の地とされ、和歌を敷島の道というのに対して、連歌は筑波の道と称された。こんな由緒のある土地に連句を弘めたいとは、連句をやる人なら誰でも思うだろう。私も永い間待ち望んで加藤先生、そしてつくば市に住んでおられる北見さとるさん、百武冬乃さん、海老原久奈さん、そして何よりも柏連句会の面々、中でも下鉢清子さんの強力な実行力のお蔭で、この会を結成できたのは満足の至りであり、御尽力下さった皆さんに感謝の外はない。

四月十日、九時十六分、下鉢さんたちと柏駅で落ちあい、五十一分には荒川沖駅に着いた。この日は折柄、ＪＲの一周年記念日で駅で牡丹餅を作って、乗降客に配っていた。私も七十余年生きて来たが、国鉄からお餅をもらってたべた経験は初めてである。長生きはすべきものとしみじみ思った次第であった。

加藤先生は車を用意して出迎えて下さったので、早速乗せていただき、筑波大学の宏大な敷地をぬけて筑波神社に参詣。私は初めてこの社に参詣したので、深々と頭をさげて、文運をお祈りした。ついで、先生は社の裏山に案内されたが、ここはテレビでも有名な翟歌の跡があり、そこをさかのぼると径はだんだんせまくなり、岩ばしる水の音が聞こえてくる。ここが例の「筑波ねの嶺より落つる男女川恋ぞつもりて渕となりぬる」の男女川の源流なのである。

私たちは、キラキラ光りながら渕となり瀬となって流れる水を眺め、耳には鶯の声を間近に、山いっぱい咲きほこっているきぶしの香にむせびながら、しばらく惘然として、あまりの感激に声も出なかった。

先年、吉野の蔵王堂に参った時感じたような古い日本が、ここには存在する。耀歌といい、男女川といい、書籍でのみしか接しなかったものを現実に見る思いはひとしおであった。そのあと、私たちは、今度は全く対蹠的に新しい筑波大学人文社会研究科棟の八階で二十韻を巻くことになったが、筑波の男峰・女峰がやさしく、いつまでも見守ってくれていた。

特集　連句鑑賞

鑑賞片言

鈴木春山洞

連句の鑑賞は、鑑賞者の連句に関与するあり方によって変化するものである。

連句について知識があるとかないとかは問題にならない。連句を愛好する心があるかないかも問題ではない。連句が読んで面白いか面白くないかも問題でない。

問題は、連句を実作しているか、実作しないかだけである。

勿論、連句を実作しなくても鑑賞は出来るとする立場を否定するつもりはない。愛好者として研究者として鑑賞している方は沢山ある。幸田露伴の評釈を排斥する方もいる代り、あの評釈に心酔している方もある世の中である。中には太田水穂の芭蕉連句の根本解説を読み耽り、凭りかかって、その眼鏡を借りて連句を読み、鑑賞している人達も尠くない。

戦前の山田孝雄・頴原退蔵・岡崎義恵・能勢朝次・小宮豊隆・寺田寅彦・柳田国男等の著作物に眼を通せば、連句についての知識は一通り得ることが出来る。まして近時の連句ブームに煽られて現出した連句関係の著作物まで視野を拡大すれば、連句については、実に該博な知識を獲得することが出来る。そこで所謂、解釈と鑑賞が容易に繰り拡げられる。そして判ったようなつもりになって終るのである。

しかしながら、ここで考えて置きたいことは、連句についての知識を得ることと、連句を知ることとは全く異質のものであるという事実である。

連句を観察するに当っても、他人の眼鏡を借りて覗くのと、自分自身の目でもって直接観察するのとでは、大いに異るのである。

連句を知ることは、連句そのものの中に没入して体得することだと思う。私は、これを連句実作という言葉に置き換えている。連句実作の結果、連句を知り、連句の醍醐味を自得する時、自然と本当の鑑賞が出来るのではなかろうかと思うのである。

その観点に立って、連句鑑賞の第一点は、発句を見きわめるところに始まる。

現代連句の不幸は、連句が文芸の世界の片隅に追いやられ継子扱いされている間に、連句から離れた発句が独り歩きをして、百年を経過し、独自の発展を遂げた俳句になっている事実である。それ自体は喜ぶべきことであり、素晴しいことである。現代社会における俳句作家数は厖大な数にのぼり、そこに製作される作品・俳句も夥しいものである。

何が現代連句にとって不幸かと言うと、俳句は連句の発句が独立したものというだけで、百年という時間の経過を無視し、短絡的に俳句として作られた俳句を、連句の立句として押し付けて憚らない風潮に抗して、出発しなければならない点を指摘するものである。

現在の俳句は、俳句として作られた俳句であって、その全てが発句(立句)になるものではない。連句一巻の巻頭に位するに相応しい発句を見極めることが大切な所以である。

連句鑑賞の第二点は、連句は詩であるという点をなおざりにしてはいけない。詩は、感激の極まるところに発する声である。詩である以上、その表現は説明・因果・理窟・記録・報告の外に立たなければならない。

連句を構成する一句一句は、長句であろうと短句であろうと、一句それ自体、詩としての独自性を保有するものでなければならない。

連句の構成要素である一句（付句）は、季の有無にかかわらず俳句であってはいけないし、俳句的表現をも許容するものではない。付句は、どこまでも虚実を貫き、実を押えて虚に游び、虚に拠って実を俱す（松根東洋城俳論）ものでなければならない。

連句鑑賞の第三点は、連句は現代生活にマッチしたものである。現代生活の直中（たなか）に生きている私達は、芭蕉や蕪村を模倣することなく、我生ける印ある作品を創作しなければならない。現代生活に生きる生活感情を脈々として伝えるものを連句の中に看取したい。

連句鑑賞の第四点は、付味の面白さ・三句の転じの面白さに着目しつつ、その根底にある情を味読することに努めなければならない。

連句は詩であると共に情を詠う対話の文学である。情は、二人の人間の間に通う「こころ」である。対話を楽しく面白く発展させるためには、二人が協力して、話題を前進させ変化させてゆくことが大切であるように、付味の面白さを味読しつつ、連句が詠いあげる世界の、情と不易流行を読み取ってゆこう。連句鑑賞の第五点は、私達の祖先である日本人が古来保有して来た美的感覚・美なるものを素直に享受する精神を連句の中に見出さねばならない。明治以来の教育は少なからずそうしたものを破壊して来た。歌仙三十六句に首尾一貫性を求めることは不可能であり、四季の運行さえも美を追求する心のまえでは春から秋に移っても異和感のない世界を構築している祖先の知恵を敬服しつつ、連句の中に生涯を埋没させたいと願うものである。

「市中は」の巻鑑賞（Ⅶ 最終回）

東　明雅

12　いのち嬉しき撰集の沙汰　　来
　1さまざまに品かはりたる恋をして　　兆

（雑。人情自。自他半。）

（現代語訳）この年までさまざまに風変わりな恋の体験を重ねて来たが、それらを詠んだ歌が勅撰集に入れられるというのは、まことに長生きした有難さである。

（付心）其人の付け。観相の句でもある。

（付味）老い衰えた状が窺われる前句をよく生かし、長い生涯の回想を付けている。前句の位によく応じている。

（転じ）打越の草庵暮らしの人から堂上の境涯らしきものに転じている。

（補説）この句もまた面影の付けと見て、小町や業平などの名を挙げている古注もあるけれども、小町は次の付句にすぐその名が出るから不当であり、また、業平が撰集の沙汰をよろこぶとするのは、いささか時代錯誤であろう。「品かはりたる恋」については、いろいろの説がある。一説に、勅撰集の恋の部には、逢ひて別るる恋・不逢別恋・経年恋・待恋・後朝などさまざまなものがあるから、そのひびきを付けたのだという。また、「風変りな恋の意」として、「品は状態・立場の意で、身分・品位のさまざまな意ではない」と見る考え方もあるが、この品はやはり、露伴が「品といふ語は源氏物語箒木巻品定の段の品のごとし」（猿蓑抄）と喝破した通り、例の雨夜の品定めに出てくるさまざまな女性とそのさまざまな恋の姿に依っていると見る方が深みがあると思う。

人情自の句が打越・前句に出ているので、自の句を三句続けないため、この句を自他半と見ることもできよう。

　1さまざまに品かはりたる恋をして　　兆
　2　浮世の果は皆小町なり　　蕉

（雑。人情他）

（現代語訳）女はみな若い時、さまざまな色恋を体験するが、やがて盛りの齢が過ぎると、どんな美女もあの小町のなれの果てのように、老醜をさらして死んで行くのだ。

（付心）観相の付け。このように小町とはっきり名前が出ているから面影の付けとは言えない。小町の故事をもって付けた句である。

（付味）もともと類船集にも「色好――小町」という付合語があるから、前句の「品かはりたる恋」から「小町」が付けられたのは自然であるが、それを小町一個人の運命

として述べないで、美女衰頽のあわれを人間の避け得ないものとして、「浮世の果は」と断定を下したところ、まことに適切であり、芭蕉らしい力強さと冴えを見るのである。

（転じ）前句をはさんで、打越は老歌人の喜び、付句は美女衰頽のあわれと、百八十度の転じがなされている。

（補説）「浮世」とは今日ひろく人生を指すが、当時の用例としては愛欲世界、好色的人生を指す語で、浮世草子（西鶴の小説）・浮世絵などに用いられた浮世と同じである。もともとは憂世であろうが、それが近世初頭から亨楽的意味に転化され、浮いて浮かれる意の浮世となったものである。

小町は、出羽国の郡司良真の女と言い、小野篁の孫ともいうが、はっきりしたことは分かっていない。歌人として古今和歌集以下に多く入集、六歌仙の一人である。天成の美貌に誇って王妃になろうとし、多くの求婚者を斥けたが、後では零落して、その終りは不明とされている。彼女を題材とした謡曲に、草子洗小町・関寺小町・卒都婆小町・鸚鵡小町・通小町・山本小町・清水小町があり、七小町と言われる。

一説によると、この句は芭蕉の孕句で、かねがねよい前句を待っていたが、凡兆の句を得て、よろこんで付けたものと言われる。いかにも、前句の見果ぬ恋の余情と、付句の小町の艶麗にしてまた悲惨なイメージとが通いあって、実によい付味であるが、さらに言えば、この句の出た場所が名残の裏二句目という所は、このような観相の句が最も適切な場所であったことも、芭蕉をよろこばせた原因の一つであったと考えられる。このような深い感情のこもった観相の句を、もし、初折で出せば、その巻はさらに発展する力を失って、失敗の作品となったであろう。よい場所にすばらしい観相の句が出たものである。

芭蕉の第一の門人其角は、その著「雑談集」の中に、いつか自分は「品かはる恋」という句に対し、「百夜が中に雪の少将」（深草少将が小町の許に百夜通った故事による）と付けて、忍恋の忍の字をうまく取り入れたと自讃していた。ところが、この芭蕉の付合を見て、自分の句などとても及ばぬと悟ったと書き、次のように述べている。

此句の鈷やう、作の外をはなれて、日々の変にかけ、時の間の人情にうつりて、しかも翁の衰病につかはれし境界にかなへる所、誠おろそかならず

（此の句の寂は徹底している。その寂の中心となるところをはなれても、日常その時その時の変化にあてはまる真理であり、また瞬間的な人間の感慨を述べたものとしても適切であり、その上、翁（芭蕉）がいつも病気がちで年老いられた境遇を表現したものとしても、ふさわしい。本当にあだやおろそかにすべき句ではない。

と言うわけであるが、やはり蕉門第一の門人だけのことはあると申さねばならぬ。

2　浮世の果は皆小町なり　　蕉

3なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　　来

（雑。人情自他半　他の会釈。）
（現代語訳）浮世の果は皆誰も小町のような運命になるというが、この老女が粥をすするにつけても涙ぐんでいるのは、どのようなわけがあるのだろうか。
（付心）其人。会釈。
（付味）浮世の果に対して、粥すゝるは、位の付けでもあり、うつりの付けでもある。
（転じ）打越の恋の気分から転じ、老をかこつ述懐の句。
（補説）「なに故ぞ」とは、老女を見た者が心の中でそのさまを不審に思う意に解さねばならない。それを言葉に出して慰めるさまと解する説もあるが、「なに故ぞ」だけでは慰めの言葉とはならないであろう。この句、草稿では「何故か」となっているのを「なに故ぞ」と改めたことにより、老女を見て怪しみ怪しく思っている者の存在がはっきりし、前句とは別の人物を登場させ、自他半の句としたことにより、打越からの転じが一層利いて来た。
ただ、打越の句を人情自他半とした場合には、この句も自他半ではまずいから、人情他の会釈と見て、前句の小町らしい女が粥をすすりながら涙ぐんでいる有様を述べただけの句として解すべきであろう。

ナウ3なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ　　来
ナウ4　御留主となれば廣き板敷　　兆
（雑。人情なし。）
（現代語訳）殿のお留主となった邸は、台所の板敷の間もがらんと淋しいものに感じられる。奉公人が粥をすするにも涙ぐんでいるのはどうしたわけだろう。
（付心）会釈。其場の付け。
（付味）前句の淋しさの情と、この句の人気のない板敷の淋しさがうつりあっている。
（転じ）この句には淋しい気分はもちろんあるけれども、主人が居ないという事による一種の解放感があり、それが一抹の明るさとなっていて、打越の観相の句から、気分的にも転じている。
（補説）この句の背景について古注以来、主人が出陣・左遷・病気・湯治などの留主であろうとさまざまな穿鑿がなされて来た。しかし、それはどうでもよい事であって、重い感じの句がこのところ続いて来たのを転ずる為の会釈として、ことにこの句は花前（匂の花の前の句）であるから、かたがた軽い場の句ととって解すべきであろう。

ナウ4　御留主となれば廣き板敷　　兆
ナウ5手のひらに虱這はする花のかげ　　蕉
（春。人情自）
（現代語訳）御主人がお留主なので、板敷もひろびろとくつろいで見える。それで下男は庭の花の陰で、虱を手のひらにのせて遊んでいる。
（付心）起情。
（付味）板敷と虱とは位の付けであり、また、前句にあった一抹の明るさが、花の句の明るさとうつり合っている。

（転じ）この句にある軽み・滑稽の気分は打越までの沈鬱な気分から一転している。

（補説）花という最も風雅なものに対して、虱という最も卑俗で穢わしいものを一句にしたところに、この句のおもしろさが存在するのであるが、「這はする」の一語で、この人物の人柄がすべて言い尽され、風狂の実体が示されているように思う。そこには虱を愛らしきものとして賞玩する心のゆとり、風狂心が感ぜられる。

虱は夏の季語であるが、暖かい所にはいつでも居て人の血を吸っている。うすよごれた冬の着物にわいた虱が、ちょうど花見ごろ活動をはじめるのを花見虱と言い、寛永十八年刊の「俳諧初学抄」に、三月の季語として出ている。

5 手のひらに虱這はする花のかげ　蕉来

6 かすみうごかぬ昼のねむたさ

（春。人情自）

（現代語訳）花の陰に休んで掌の上に虱を這わせて遊ぶと、霞を動かすほどの風もなく、眠たくてたまらない春昼である。

（付心）其人の付け。

（付味）前句の人の余情。うつり。

（転じ）打越の屋内から、屋外に出で、駘蕩の気分に転じている。

（完）

本号で「市中は」の巻鑑賞が一応終了する。もともと私の連句鑑賞法は第二号において発表してある通り、①一句一句のおもしろさ、②前句と付句の付心・付味のおもしろさ、③三句目の転じのおもしろさ、④一巻全体の序・破・急のおもしろさ、そして最後に一巻を通したあわれ・おかしみなどを考慮するものであるが、右のうち、①・②・③については、「市中は」の巻鑑賞のⅠからⅦまでにおいて、それぞれ述べて来た。それでここでは主として、④の一巻全体の序・破・急と最後のあわれ・しおり・おかしみなどを中心に論じ、全体のしめくくりにしたい。

まず、序の段である表六句は、発句・脇の市内の雑沓から、第三・四句目の田園生活へ五句目・六句目の僻地を旅する人の姿情へと、それぞれ平凡な庶民生活が、感覚・労働・経済といろいろの角度から取り上げられ、穏かな中に変化が自然にあり、非常に興味深く、親しみが持たれる。まさに序の段のお手本であろう。

次に破一段である裏の十二句は、折立の句から若い女性の面影を偲ばせる句が「蛙こはがる」という語にはっきりすると共に、前句の「長き脇指」に付いた時は一種のおかしみが伴う。さらに「能登の七尾の冬は住うき　兆」・「魚の骨しはぶる迄の老を見て　蕉」という老残の身をかこつ酸鼻な句が続いたかと思うと一転して「待人入し小御門の鎰　来」・「立かゝり屏風を倒す女子共　兆」と平安貴族を思わせる恋の句と変わり、また若君を見たいと騒ぎ立てる召使いたちの姿には、真実と滑稽とが溢れている。次に

「湯殿は竹の簀子佗しき　蕉」・「茴香の実を吹落す夕嵐　来」とその笑いを静めたさびさびとした境地に転じたかと思うと、「僧やゝさむく寺にかへるか　兆」・「さる引の猿と世を経る秋の月　蕉」と、ともに世のアウトサイダーである僧とさる引のともに寒々とした生活を描いて向付としている。そして最後の折端にはそのさる引の細々とした生活を「年に一斗の地子はかる也　来」と具体的に示しているが、右の通り、この面十二句は、人物・場面・気分の変化が実に見事であり、全く不自然なところが見られない。このように付味・転じのよい作品を「珠がころぶ」と言うが、まさに作者三人の呼吸がぴったりと一つになって、圓転滑脱、完璧な作品というべきであろう。

破二段としての名残の表十二句は、折立の「五六本生木つけたる潴（みづたまり）　兆」から始まる前半六句は、潴で足袋をふみよごしたり、その道に主人の馬のあとを追う刀持があらわれたり、でっちが荷う水をこぼしたり、むしろがこいの売屋敷があったり、番椒が色づいていたり、付心は分かるけれども転じと付味が十分でない。六句すべて屋外の景であるのも変化が生まれない一因であろう。

七句目「こそこそと草鞋を作る月夜さし　兆」・「蚤をふるひに起し初秋　蕉」あたりも農村に住む小百姓の生活で、刀持やでっちの世界からさほど変化していないが、十一句目の「草庵に暫く居ては打やぶり　蕉」によって初めて名残の表らしい変化がおこった。このあとに続く「いのち嬉しき撰集の沙汰　来」もすばらしい付けで、かくて、この名残の表、破二段はぎりぎりの所に来て、漸くいわゆるヤマ場を作ることができたのである。

急の段として、名残の裏六句は、折立に「さまざまに品かはりたる恋をして　蕉」と恋の句で述懐をかねた句が出ている。名残の裏になって、恋を出すのはいささか異例であるが、この巻は名残の表に恋が出ていないのでここに出したものであろう。その次が「浮世の果は皆小町なり　蕉」という一句としても深みのある、また前句への付味もぴったりの名句が出て、かくて、この一巻のヤマ場は「草庵に……」の句から、この「浮世の果は……」の句までに決まったのである。そして、「御留守となれば廣き板敷　兆」の解放感から、花の句・挙句と続く明かるいのどかな気分で、めでたく一巻が満尾されるのである。

右のように一巻全体を通読して、この巻が三十六句の中にいかにさまざまな人間の社会・階層・生活・感情を広く描いているか、その点にまず感嘆させられる。それは源氏物語の世界・小町・西行らの世界にも及んでいるが、反面、農民・さる引・僧・刀持・でっちなどの世界もあまさず、そこにあわれとしおり・おかしみを描き出している。

さらに「浮世の果は皆小町なり　蕉」の句に見られるように、一句一句の含蓄がきわめて深く、味わえば味うほど滋味が溢れるのである。すべてのすぐれた文学作品に共通であるように、この作品は間口が極めてひろく、しかも、その奥行が極めて深いところに、この作品を名作たらしめる要素が存在する。

連句鑑賞の基盤

大畑健治

伝統的な連句は、感性を媒体として成立している。ところが現代人は、意味や観念的なイメージによって芭蕉の連句を鑑賞しようとする。前句と付句とを二句一意の如く解釈し、三句の転じは中の一句を二意に解釈して意味の改変で処理してしまう。貞門や談林の俳諧と違い、蕉風俳諧は句意の改変によって三句目の転じをするわけではない。一句一句は完全に独立しており、それぞれの句の表現する事実から喚起される現実的な実感が交響し、二句や三句に渡る余情の流れを形成する。

(1) 実感を内包する言語

多少なりとも伝統的な連句を学んだ人は、語句の意味が理解できても、語句の分類や発想感覚の違いに戸惑った経験がある筈である。木材は木であるのに、何故「木類」として扱わないのか。正花は植物であっても、何故「植物」ではないというのか。現代人の言語感覚からすると、実にいい加減な思い付きで規定しているとしか思われないようなことが沢山ある。しかし、逆にいえば、現代ほど言語を粗雑な形式で束縛しているものはない。言語から原初的な実感性を排除し、観念的な意味を記号的に知識化するところに、既成概念を作り上げている。現代人が言語に対してさまざまな先入観を抱くのも、意味を中心とするこうした概念が定着していることに原因するのであろう。

先入観による誤解の一つに、時代錯誤がある。古語や死語は容易に現代語との違いを認め得るが、現代でも使われている語句の場合、往々にして時代的な隔たりに対する注意を怠ることがある。足袋や股引は最近では余り愛用されなくなったが、年配の人には防寒着としての概念がある。そこで「股引の朝からぬるゝ川こえて」や「はきごゝろよきめりやすの足袋」の句に接すると、冬の季句と即断してしまう。江戸時代、足袋は武家や商家や芸の家元などで日常的に着用し、股引きは農家や大工や旅人などの男性が季節を問わず着用している。語句から意味だけではなく、現実的な事実を想起する習慣が現代人にあれば、先入観によ

る誤解も少なくなるであろう。

また植物の瓢は、現代では秋季に扱われている。古歳時記では花を愛でる夕顔と同じく晩夏に扱われており、その実の収穫期や実を器に工作する時期を秋とし、器財としてはそれを用いる時節が季に定められている。現代人は「瓢簞は秋」と千編一律に考えてしまうが、これも固定概念に囚われた結果である。

連句では観念よりも事実を表現するものとして言語を扱う。去嫌の判定基準となる素材の分類も、現実的な事実に接するときの感覚性を重視して、生命の有無や自然物と人造物などの識別を基本とし、これに現実的な感覚による識別を加えたものである。樹木は生類としての「木類」に分類され、人工の手が加わった柱はその用から「居所」に分類される。

一つの素材も周囲の状況をいろいろ感じさせる場合は、それらとの関係においてさまざまに分類される。霜も現代では気象現象の一つとして科学的に分析されるが、俳諧では無風の晴天を想起させ、未明の寒気を想起させるものとして捉えられる。霜それ自体に限らず、降霜の気象条件や季節感までもが一体となって把握される。その結果霜は時節（冬）、時分（朝）、天相、降り物に分類される。いわば霜という語句そのものが、現実的な体験による感受性を喚起させる言語として扱われているのである。

こうした言語感覚は、合理的な現代の言語感覚からすれば前近代的な未分化な意識によるものであるといえようが、現代人の抹殺してしまった流動的に生きている事実を肌で感覚的に感じ取る言語を、俳諧が現代に伝えてきたものであるといってもよい。従って、芭蕉の連句を鑑賞する者は、常にこうした言語感覚の作用していることを、基本的に心掛けておかなければなるまい。

(2) 事実による感受性の喚起

連句で尊重するのは、擬似体験によって感受性を喚起する具体的な事実の表現である。現代文芸のように、抽象の上に抽象を構築した表現でも、読者は感動を得ることはできる。しかしそれは、頭の中で捏造された感動であり、思想書を読んだときの感動と次元を同じくしたものといってよい。抽象的な本質によっても感動は得られるが、連句の感動はそうした思考性によるのではなく、物の本情に触れて共感する感受性によっている。現実的な事実からそこはかとなく感じられる共感こそが、連句の詩情の根底にある。観念的な知識による先入観を払拭して事実そのものに接するとき、人間は眼前の事実から自己の生命性を自覚させられ、共感的に感動を覚えることがある。

例えば、「灰汁桶の雫やみけりきりぎりす　凡兆」（『猿蓑』）の発句は、事実を述べただけのものである。この句は眼前の事実として、視覚的に解釈することもできる。写生を唱えた俳人の句ならばそれでもよいであろう。しかし、連句は五感で認識した事実を尊重する。読者は五感によって体験した現実的な世界を、この句から感じ取らなければ

ならないのである。現代に用いられていない語句は、まず辞書的にその意味を確認する。「灰汁桶」は灰汁を溶かして染色などに用いる上水を入れた木製の桶である。「けり」は詠嘆的な過去の助動詞である。「きりぎりす」はコオロギの古称で、触角は体より長く、二対の翅と尾端に一対の尾毛を持つ。後脚は長く、跳ねるのに適する。草地などに多く、物の陰にかくれ、雄は夏から秋にかけて鳴く。こうした語意から一句を訳すこともできる。しかし、コオロギの形状を解説しても、句の味わいは生まれてこない。大切なのはコオロギの習性を体験的事実によって復元することである。物音や震動などの気配が感じられなくなったとき、薄暗い場所に潜んで辺りの様子を窺うように鳴き出す事実と、秋の夜長をしみじみと感じさせられる共感性を思い出すことである。日本人の心は、雫の音やコオロギの声に自己の生命的な存在感を実感し、そういうものに出合うと自然と共鳴し始める。感覚的な体験の復元により、視覚や触覚や臭覚や味覚の世界をさし置いて、「雫やみけり」と「きりぎりす」が聴覚の世界で結び付けられる。雫の音が止んでコオロギが鳴き出すのは自然の関係であり、自然であるから読者は共感を覚える聴覚の世界で、無理なく両者を統一的に把握できるのである。頻に漏っていた雫の音は次第に衰えて、その間隔も長くなり音も小さくなってゆく。そして最後の一滴がかろうじて滴り終わると、暫時無音の世界が横たわる。やがて動くもののない気配を察して、周囲の様子を窺うように恐る恐るコオロギが鳴き始める。この全体的な状況の時間的推移は、辞書的な「けり」の意味から導びき出すことはできない。表現された事実から現実的な感覚を喚起することによって可能になる。

感覚的な感受性の喚起による感動性の伝達は、作者と読者の言語認識において、表現以前における共通の了解がなければならない。日常会話も、話し手と聞き手の間にどのような内容をどのような形で表現するかという大前提が暗黙の裡に了解されていて、表現から内容を復元することができる。ましてや特殊表現をする短詩型の俳諧においては、鑑賞者はどのような約束事によって句が詠まれているかを知っていなければならない。

蕉門の俳論書を見ると、作者の心構えについていろいろな角度から説かれている。それらは皆、観念的な思考作用を停止して、現実的な事実に向かったときに自然と心の動いてくるところを句に詠め、ということを基本にしている。心の動きというのは、そのものの本情を感じ取る共感をいう。その対象を現実的に表現し、読者がこれを擬似体験して復元し、そこから本情を感じ取るのであるが、発句や脇句の場合はともかくとして、第三以降の付句は眼前の景をそのまま句にするわけではない。だからといって観念的な思いを述べたりすると、俳諧の感動的な共感性を読者に伝えることはできない。そこで作者は現実的な実体験を想定して表現することになる。付所を示す七名八体の八体も、こうした現実的な実体験の想定に配慮して考案されているようである。

(3) 前句と付句の関係

「其人」は、前句に詠まれた場所にいそうな人を付けよ、ということである。「其場」は、前句に詠まれた人物や事件がありそうな場所を付けよ、ということである。「其」が付されていない「時節」「時分」「時宜」「天相」も同様で、現実的な事実としてありそうなことを前句から考えて付けよ、というのである。「観相」や「面影」も同じであるが、これは現実的な事実を想定したものとはやや違う。しかし、「面影」は知識によりながらも普遍性を帯びた事実として認められたものであろう。「観相」は生命的な存在感を直接句に詠んだものとして認められたものではないかと思われる。付所においてもこのように、現実的な事実の擬似体験を重視しているごとが理解されるであろう。

芭蕉は「灰汁桶」の発句に、「あぶらかすりて宵寝する秋」の脇句を付けている。これは、コオロギが鳴き始めた後のことを付けたのではない。連句では、その続きを付けるなという。雫が止んでコオロギが鳴き始めるその時を付けたのである。脇句は発句と同じ場所で同じ時刻の条件で付けられている。同時進行形なのである。「あぶらかすりて」は「雫やみけり」と同時刻であり、「きりぎりす」は「宵寝する」と同時刻なのである。だから二句を解釈するとき、発句と脇句の句意をそしてやそれからという接続詞で結んではいけない。強いて接続する語を加えるなら、その時は、その場所は、そこにいた人は、が適当なのである。連句の文体は独立する句が常に並列されている関係で、意味を発展させて付けることはない。時間的に空間的に、同時同所の出来事が添えられながら、アングルを移動してゆくだけである。「灰汁桶」の句でさまざまに変化してゆく静寂な相が、光も薄らいで安息に移ってゆく安らぎの相と、同じ時間の推移の中で映発するとき、聴覚と視覚の世界が交錯して一層現実的な臨場感を感じさせる。第三は「新畳敷ならしたる月かげに　野水」という、宵寝をしている人のいる場所を付ける。コオロギの鳴き始めた情景は、ここにはない。安らぎと清浄な感じの交感する場面を彷彿するのみである。四句目は「ならべて嬉し十のさかづき　去来」と、その場にいる人のことを付ける。この人は、打越で宵寝をしていた人ではない。打越の句意からは離れ、第三の句としか関係していない。清浄感と軽い心の動きとの交感する世界が、そこに匂い立ってくる。三句目の転じというのは、打越と趣向が類似しないで、新たな世界を展開していればよいのである。

それならば、打越と付句との関係は、三句の渡りなどといって取り上げる必要はないであろう、ということになる。連句一巻に確かに意味的な筋など存在しないのであり、句意は前句と付句との交感する余情を味わうためのものでしかない。付句を味わうときには、打越の句意は不要の存在となっているのである。それにも関わらず、三句目の転じ方が取り沙汰されるのは、どうしたことであろうか。一巻の序破急とは何によっているのであろうか。現代感覚では

理解に苦しむ。

(4) 三句の渡り

現代人は、余情というと想像力豊かに周辺世界を拡大して味わうことであると考えてしまう。「灰汁桶」はどこに置いてあり、それを使う人の職業や身分はどのようであり、作業は中継したのか終了したのか、コオロギはどこで鳴いており、その時刻はいつ頃かなど、あれこれと空想する。しかし、これを余情とすると、脇句に示す人物や時刻は無用な存在となってしまう。果ては、発句と脇句との余情の映発は、曖昧模湖とした雰囲気や気分だけとなってしまう。そこで憶測ではあるが、この余情というのは実相を示す本情と、その本情を感じさせる世界にあるのではないかと思われる。静寂な実相を具象する世界と、そこから心の色に映された静寂感の世界である。例えば、発句の句意を捨象し、具象的な静寂の実相を念頭から払拭しても、虚相の心の色として静寂感は残る。この静寂感は、脇句の実相的な本情を包む安らぎ感や第三の清浄感とも交感し得るが、四句目の軽い満足感とは相容れない情感である。句の実相的な本情は二句の間で交感するが、句の虚相としての心の色は三句に及ぶ。これがいわゆる三句目の転じに対する三句の渡りの脈絡を形成する。芭蕉の連句に鎖を繋いだようなぎこちなさがないのも、この心の色が滑らかに自然に移行しているからであり、名著といわれる越人の『俳諧冬農日槿花翁之抄』にもその片鱗が窺われる。意味の流れとして理解できない序破急による一巻の構成も、心の色の濃度によって山場が設けられ、その動きの緩急によって統一されているといってよいであろう。研究としては憶測の域を脱していないが、可能性としてはかなりの確信がある。

この他、「正花」のように風流精神が観念的に絡んだ語意や句意について触れる紙数もなくなってしまったが、連句の基盤にはこうした発想法がある。連句の鑑賞も、こうした発想法を基盤に据えてなされるべきであろう。

武翁賞作品募集

作品は歌仙または二十韻だが、そのやり方は自由、九月十日（土）までに呈出されたい。

応募作品は「武翁賞応募」と朱書すること。

付廻し祝賀歌仙

東へ向けて

高々と東へ向けて初国旗　井本　農一
　年あけ祝す雅楽荘重　杉内　徒司
頼母しき砕氷船の順風に　宮坂　静生
　のたりのたりと鯨潮吹く　高藤馬山人
有明に「月よりの使者」読み返す　入江たか子
　淡き日さして秋は来むかふ　北　杜夫
西鶴忌信濃はそばの白き頃　武藤　禎夫
　地酒を仕込む酒樽の箍　五十嵐譲介
呼声に脊筋を伸ばす縁の猫　大畑　健治
　爪切る横に衣たたむ妻　二村　文人
王位より勲章よりも重きもの　山地春眠子
　つひうっかりと切札を引き　川野　蓼艸
地上屋にして俳諧師含羞草　笠原　古畦
　色鯉跳ねる孤鯉庵の月　尾形　仂
利根川にたしかな寝息ひびかせて　金子　兜太
　インプットするマイコンのキィ　秋元　正江
大樹なる花は明るく雅びやか　草間　時彦
　鳥たちの巣に充る啐啄　原田　千町

東　明　雅氏叙勲祝賀会

この日の案内状の大略は次の如くである。

東　明雅氏は昭和十四年東京帝国大学文学部国文学科を卒業以来、東京都立一中、松本高校、信州大学に三十余年教鞭を執られた事により、昨年十一月三日、勲三等旭日中綬章を受けられました。

現在氏は復興の兆しをみせ初めた連句の普及に余生を捧げたい。

と語っておられます。

我らここに発起して左記の集いを催す所以です。

発起人　井本農一氏他四十七名

記

一、日時　昭和六十三年三月二十日（日）午后一時～三時
一、場所　学士会館（本館）二階二一〇号室
一、会費　一万円

さて祝賀会は一時、松本高校、信州大学有志による松本高校寮歌の合唱で始まった。

続いて各時期の関係者、次の五氏の祝辞がのべられる。

祝詞すぐ田の風にのる春祭　鍵和田秞子
煙草やめると今日も決心　金子　恭子
かりそめの君が言葉に胸熱く　今泉　忘機
柔木枕あけ初むる朝　馬場　彬風
恋すてふこの包丁の切れること　淺野　禾穂
言明瞭意味の不明な気配り師　小谷　参木
飢餓時代なかりし病世に溢れ　赤田　聴雨
つくり瀧ありすこし涼しく　岡田　史乃
武翁賞俳諧の苑そだつらん　三井　嫩子
朴の双葉の香りこぼるる　井手　欅晴
玲瓏とつくしが丘にのぼる月　今泉　宇涯
青松虫かしげき鳴き声　宮下　太郎
秋深し師の書抱きて旅に出で　二宮　操一
己がてのひら己れ眺むる　小出きよみ
古稀もなほ夢追ふ人の貌の冴え　宮脇　昌三
城跡静か深き空濠　根津　芙紗
猫蓑の旗を担ぎて花の山　国島　十雨
天地金泥ちりばむる春　鈴木春山洞

昭和六十三年三月二十日満尾
於　東京神田学士会館

松本高校　中條高徳
東京都立一中　富永孝雄
同　須郷道也
信州大学　馬瀬良雄
連句俳句　草間時彦

次に明雅夫妻に花束が札幌の四方万里子氏より、記念品が猫蓑会の中島啓世氏から贈られ、明雅先生より謝辞があり、笠原古畦氏の乾杯の音頭で祝宴が始まった。

出席者二百名のうち連句、俳句関係者が半ばを超えたのは、連句指導に寧日なき先生の最近の活動ぶりを反映しているのであろう。

会場の一隅に歌仙画コーナーが設けられている。

この祝賀会のための付廻歌仙の発句を井本先生にお願いした処、一月四日に、

東門へ高く揚げて初国旗

を頂戴したが、それを追いかけるように、上欄のように直して欲しいとの速達便が届く。それで始った歌仙はどの付句にも祝意がこめられているのがほほえましい。当日までに半歌仙を済ませ、会場で後半を付けてもらう予定が会場で歌仙を画に描いてもらうという趣向に変わり、三十句を下俳諧する運びになったのでいささか天手古舞、何よりも画を担当された斉藤画伯には御手数をかけて仕舞った。

歓談もまだ尽きないのに三時となる。名残りはつきない内に五十嵐譲介氏の三本締めで宴は閉じられ、明雅先生御夫妻を拍手の裡に送り出し祝賀会は終了した。（杉内徒司）

二十韻　東風に

東風に明けゆく玉垣の雅楽かな
　客人迎へ祝ふ梅が香
糸毬をかがれば仔猫まつはりて
　厚く伸べたる名代煎餅
萬(ウ)緑の柏の里の月静か
　思ひつのりて胸の汗ばむ
猛将もクレオパトラにまどひける
　金杯干せば堂の歓声
鳩杖の握りの鳩の唇赤く
　母の編みたる縞のセーター
マイン(ナオ)河川面に古城の影ゆれて
　円が高くて荷物いっぱい
壇上に寄り添ひ拍手うける人
　いつ死んでもと思ふやや寒
独り寝にあまるベッドを照らす月
　炊きあがりたる蜂の子の飯
大仏(ナウ)の鋳造の跡掘り出され
　芽出度き席にあたらしき知己
けふの花香り深めよ俳諧士
　叙勲を祝ふ春もたけなは

昭和六十三年三月二十日首尾
於　東京神田学士会館

別所真紀子
加藤　耕子
米谷　貞子
中田あかり
式田　和子
中島　啓世
水野　吐紫
柴田　竹代
竹内　テル
小林しげと
K
本屋　良子
見学　玄
下鉢　清子
油井香代子
小澤　實
宇咲　冬男
今泉　宇涯
大林　杣平
桜井天留子

叙勲祝賀会の宴たけなわの会場で、付廻し歌仙とは別に、式田和子さん、大畑健治さん、五十嵐譲介さん達のお世話で、上記二十韻がめでたく首尾いたしました。

また引出物として連句辞典（金文字入り）、季刊連句20号、かけ紙に明雅先生の三つ物が印刷されてある紅白の三つ物饅頭を頂きました。

三つ物

俳諧の大道無門梅薫る
　白鳥去りて燕来る空
春炬燵余生いよいよひそやかに

発句も脇も、俳諧の季節の移ろいを広い景に見事に捉え、殊に第三は、当日の先生の素敵なお姿に重ねて、春炬燵に艶なる雰囲気が漂います。内に秘められた力強いご決意をこめられた〝いよいよひそやかに〟が眼目で、原稿を書き了えて春炬燵で浅酌していられる先生と、いつも控えめに内助の功をつくされる奥様が彷彿としてまいります。郁子夫人は柏連句会でご活躍でいらっしゃいます。

なお当日の余談、会が終ってから斉藤吾郎画伯と耕子さん、清子さんと四人で、歌仙画の屏風表装を銀座松坂屋へ頼みに行きました。結果として表装はしっかりお願いする事ができましたが、私の早とちりの為、思わぬ珍道中のおまけが付いてしまいました。

忘れることのできない永い春の一日でした。

（秋元正江）

叙勲祝賀会の挨拶

お礼の言葉

東　明雅

一言御挨拶申し上げます。

本日は皆様、御多用の折、わざわざ御遠方より、私のためお集まりいただき、本当に有難く厚くお礼申し上げます。

また、只今は草間先生をはじめ、中条君・富永君・須郷君・馬瀬君から、それぞれ私にとって過分なお言葉を頂戴いたし、まことに恐縮いたしております。

御承知の通り、私は昭和十七年に都立一中の教諭となってから、昭和五十五年、信大人文学部を停年退職するまで、凡そ四十年に及ぶ長い教員生活を送ることが出来ましたのは、偏に皆様の御庇護のお蔭と、心から感謝致しております。その間、お教えした方の数は、数え尽すことはできません。その教え子たちは現在、働き盛りの年令となられ、国家有用の材として御活躍中であります。本日は四十年ぶりにお目にかかる方もあり、このように大成された姿を拝見することは、私の最大のよろこびであり、楽しみであります。

また、楽しみと申せば、私は昭和三十六年信大文理学部に勤めておりました頃、伊那の根津芦丈先生につき、連句というものを学び、それより一途にこの道をはげみ、今日に及んでおります。その昔、連歌の大家飯尾宗祇が、連歌を一緒にやる仲間は従弟ほど親しくなると申しておりますが通り、私は連句を通じて、多くの方々と本当に親しいおつき合いが出来ましたことは、私の第二のよろこびであり楽しみであります。

このように、お教えした方々が立派になられるのを楽しみ、また、連句というものを通じて多くの方々と御親交を得る、この二つこそ、いわば私の宝物でございます。

私も七十を越えました今日、この二つの宝を益々大切にして、余生を静かに暮らしたいと念願いたしておりますので、皆様、何卒今後ともよろしくお願い致します。

最後になりましたが、本日の会の肝煎として、お膳立て一切を一手に取りしきって下さった杉内徒司さん、それから、この会場を確保して下さった井手欅晴さん、また、いろいろお手伝いただきました猫蓑会の皆さんはじめ、胡蝶詩社の千田佳代さん、また、さざなみ会・柏連句会・七騎の会その他の皆様、また遠くから駈けつけてすばらしい歌仙絵を披露して下さった斎藤吾朗様、皆々様の御尽力に対して心からお礼申し上げます。

どうも皆さん、ありがとう存じました。簡単ながら右お礼の言葉とさせていただきます。

（昭和六十三年三月二十日　於学士会館）

蓑虫

付勝練習二十韻

東　明雅

切締	句	月	日
投	7	20	

立句　蓑虫の音を聞に来よ艸の庵　芭蕉
脇　初めて涼し掛けし濡縁　正雄
第三　海岸線波頭真白に月ありて　千町
四句目
治定　飛ぶやうに行くホバークラフト　遊
1　近日帰国の奉仕隊員　吐紫
2　影踏みごっこ兄と弟　ますみ
3　犬に敗けじとジョギングのひと　隆秀
4　登山電車の山陰に消え　良子
5　匂ひ漂ふソース焼そば　光子
6　大鯛つくる庖丁の冴え　上月淳子
7　一夜干さるる背開きの魚　慶子
8　添寝の吾子の甘き乳の香　元子
9　水兵服の似合ふ外人　妙子
10　熱いミルクに砂糖二夕匙　井田天留子
11　テール・ランプの流れては消ゆ　淳子
12　ロックにのりて流る歌声　治子
13　ヨーヨーを振る兄と弟　千町
14　小犬追ひかけ駈けてゆく子ら　千雪

※とになって、波間の月を眺めて感慨にふけっている状であろうか。おもしろい場を設定している。2は影踏み遊びをやる兄弟を出し、軽い四句目ぶりである。この句と似た句が13でこれも付味よく転じが利いている。同じく子供を出したのに14・15がある。14は無難であるが15は「幼らの背な」とわざわざ背を出されたのは何故であろうか。8にも子供がいるが、この句は何か恋の呼び出しみたいな感がないでもない。次の句で恋句が出れば、この句ははっきり恋の呼び出しである。この点、21・22にもいささか恋の呼び出し的なところがあり、それが絶対に悪いというわけではないが、四句目はもっとあっさり付けた方がよいのである。20の若者もそれではないかと作者が心配されているが、20にはそれはないのではないか。尤も、恋句はどんな前句からでも起すことができるのであるから、極端に言えば前句はすべて恋を呼び出しているとも言えよう。

さて、3はジョギングという語が新しく、気分が変わっている。犬は14にも出ているが、16は犬そのもの、17はびくの小魚、7は背開きの魚など、いずれも人情なし（場の句）で付けておられるが、このような付け方もあってよい。

食物をもってあしらった方が5・6・7・10であるが、これも第三までの気分を転ずるのに具合がよい。ことに5は現代的であり、庶民的であり、軽くて四句目にふさわしい。その点6は気分的にやや重く、7も食物だが、この気分もやや重い。その点10は気分は転じているが、人情自に近くなっている。

15　砂糖菓子買ふ幼らの背な　冨　美
16　おのれの影に戯れる犬　杉　亭
17　鰓うごかしてびくの小魚　あかり
18　舳艫きそひつ漁舟いでゆく　雅　代
19　風に飛びゆく軒の手拭ひ　美灯子
20　バイク駆りゆく若者の群　澄　子
21　ひとつ絆を絶つは易けれ　鋭太郎
22　コーヒーを手に黙つづき居り　よしえ

（応募受付順）

四句目はやすく軽く付けるというのが昔からの教えである。それは発句・脇・第三とそれぞれ気骨の折れる句を作って来て、ここでまた趣向をこらした句を付けるのでは煩わしくなり、一巻の進行がかえって単調になるからである。「四句目ぶりとて、なり・けりなどの軽き留りにて、ふしなきことをこのむなり。古事・本説など嫌ふなり」と「俳諧無言抄」にも言っている。古事とは昔からの深いいわれのある事柄を言い、本説とは出典と同意で、ある語句、特に故事・成語・引用句などの出所・典拠をいう。とにかく、あまり難しいことを四句目には出さないようにすべきである。

応募された句は、いずれも右のことをよく心得ておられ、その点ではあまり問題はなかった。しかも、皆よく前句に付き、転じも利いたのが多く、一句治定するのに苦労したというのが実情である。

1は海外に奉仕隊員として活躍した人が近々に帰るこ※

9は思い切って変わった発想の句で、これはこれでおもしろいし、付味も転じも上々である。ただ、この句も恋の呼び出しとなり、次の恋句が付けば、はっきり恋の句になるため遠慮した。

4は前句が海なのに、付句が山では、あまりに視点が急速に移動して忙しすぎよう。この点は11もテール・ランプが自動車の尾燈ならば同じ難を免れない。12は、発句に「音を聞きに来よ」とあるので、二句隔ってはいるもののやはり問題である。18は勢いがあって打越の落ちついた気分から転じてはいるが、何としても「舳艫きそひつ」という表現がすこし古めかしいのではなかろうか。19もおもしろい景を詠んでおられるが、この「軒」と脇句の「濡縁」とが、居所の打越である。

治定した句は、この海面を行くホバークラフトの新しみはもちろんだが、一句に何か勢いがあり、静かな脇の境地からあざやかに転じ得ている。付心は前句に近いし、発句の「来よ」と「行く」とが歩行態であるという難もあろうが、一句としてよいのが絶対であるという点から、この句を頂戴した。

次は雑（あるいは夏・冬）、そして必ず人情の句で付けていただきたい。折立に恋句を出すことは、昔は嫌ったというけれども、こだわることはない。恋句で内外なしの句など付けるとおもしろいかも知れない。恋句の外、もう裏に入ったのだから神祇・釈教・無常・地名・人名何を出してもよいのである。

亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧興行

第二十五回　猫蓑会

第二十五回猫蓑会は四月三十日（土）、江東区亀戸天神社社務所で、同天神藤祭りの一環として、正式俳諧を興行、奉納し、そのあと、二十韻八巻を首尾した。

第一部　正式俳諧興行　「藤浪や」一巻

第二部　二十韻興行　「藤房や」他七巻

㈠　役　割

宗匠　東　明雅
脇宗匠　杉江　杉亭
執筆　豊田　好敏
知司　秋元　正江
副知司　中島　啓世
副知司　上月　淳子
座見　中田　あかり
座配　内田　麻子
花司　副島　久美子
配硯　八角　澄子

㈡　次　第

一、席入り　（知司の指図により座見・座配の役）
二、配硯　（重ね硯を配る）
三、献花　（花司）
四、執筆呼び出し　（宗匠）
五、文台捌　（執筆）
六、俳諧興行　（知司、挨拶のあと連衆付句）
七、花前　（執筆）
八、玉串奉献　（宗匠）
九、花の句披露　（宗匠）
一〇、端作り　（執筆）
一一、吟声　（執筆）
一二、文台返し　（執筆）
一三、作品奉納　（執筆）
一四、挨拶　（知司）

二十韻　藤浪や

藤浪や楽の音ゆるく流れゆき　澄子
亀鳴く池の朱の反橋　啓世
春障子締切近き稿成りて　郁子
飴玉ひとつ放り込む口　あかり
宵(ウ)の月エアロビクスの影揃ひ　和子
忍び逢ひする露寒の苑　麻子
海桐(とべら)の実三つに裂けて恋の果　千町
下戸が酔うたる直会の席　正江
らく隠居土地も上りて株上り　杉亭
師宣歌麿北斎の額　幸雄
アール(ナオ)デコのデザイン涼し巴里の夢　天留子
金髪娘好きなエクレア　遊
手をつなぎ腰を抱き合ふ二人づれ　彬風
添ひとげしよりひとのきびしき　正雄
鮟鱇の軒に吊され月の夕　哲
顔見世狂言立席で見る　淳子
近頃はとんと履かない下駄を買ひ　しげと
猫も箱入猫ばかりなり　笑人
俳諧の行先花の爛漫と　明雅
石の坂道蝶を追ふ子等　執筆

奉納俳諧に参加して　原田千町

亀戸天神への奉納正式俳諧は昨年に続き二回目となりました。「奉納の目的は神仏に対しその徳を讃揚し加護を祈願、就中歌道上達に関して…」と辞書にあり、連句で神をお楽しませ申し連衆も楽しみ、然も常とは異なるハレの意識に身も心も装い正し神前に俳諧致しますのは単に伝承の為でなく連句の面白さが俗に堕すことを止めより貴いものが敬虔の中に生まれるようにも思えます。嘗て天満宮への連歌奉納は夥しい数でしたとか、連句の時代になりましてからはどれ程でしょうか。

蕉門の澤露川が元禄十五年に奉納俳諧一冊を成したこと偶々知りましたが当時はまだ盛んでしたのでしょう、この度の様な奉納俳諧がこれから屢々催されるようになりましたら、それもこの道の隆盛の証しと同好の者には喜ばしいことでございます。女も一般に連句を嗜める時代になり殊に猫蓑会は女性が多くこの優雅な藤祭には相応しく思われます。

柏で行いました正式俳諧の稽古の後の下俳諧に八角様の伸びやかな御句が高点で発句となり十句までを進めました。当日は好天に恵まれ満開の藤は酔う程に匂い立ち、執筆豊田様のよどみない美事なお作法、付句も順調に出て目出度く一巻満尾し御奉納申し上げ、その場に居合せた幸せを感じました。

藤房や　雑賀　遊　捌

藤房やそこはかとなく匂ひをり　遊
春深みゆく朱の欄干　元子
山笑ふ使ひ馴れたる杖曳きて　彬風
汁やや辛き立喰ひの蕎麦　孝子
涼風にそよぐカーテン月上る　久美子
金魚玉見る瞳つぶらに　孝
悪いひとお酒の味も教へられ　元
チッチョリーナに弾む国会　孝
叩き台また叩き台間接税　風
口笛吹いて旅支度する　美
羽田からひと飛び翔んで雪祭　風
冬の鷗の岸壁に舞ふ　元
鉄火肌黙って人の罪も被て　孝
丁か半かで賭ける求婚　風
月静かピエロの泪照らしをり　元
欅並木もいつか黄落　美
父の忌を済ませて母の秋袷　孝
すり寄る猫を膝に抱き上げ　風
橋くぐりくぐりて花の隅田川　遊
朧に映るビルの高低　美

藤浪の　市野沢弘子　捌

藤浪の風満身に詣でけり　弘子
目借る蛙の潜む池岸　杉亭
梭にかけし春挽糸のつややかに　啓世
カタカタを押し遊ぶ幼子　亭
ビール酌む男の背を照らす月　世
指輪褒めつゝ握る汗の手　り
書棚より男色鑑取り出だし　亭
三島由紀夫の好む禁色　り
うねうねとやや傾ぎたる石の磴　世
ラグドーン吹く風葬の街　亭
窓辺より寒鴉一羽の飛ぶを見る　り
白息吐きて配る郵便　亭
この身にはあなたが宿って居りますの同　亭
秋の釋奠違ふ姓書き　世
三日月を左右に振りて久礼峠　同
蔦ななかまど映ゆる紅葉　り
来し方は楽しき事の少なくて　亭
不善重ねて過す明け暮れ　子
ふり上ぐる象の鼻へと花吹雪　世
陽炎の中栄転を聞く　美

藤まつり　高瀬美保　捌

藤まつりうす紫の白昼夢　美保
鷽の碑の建つ麗かな棚　しげと
風船はどの子の手より飛ぶならむ　麻子
買ひ物すんでちょっと一服　美灯子
月待ちて雨戸五尺を残し置く　澄子
和尚が好きな人と焼味噌　と
チャンスです示し合せて紅葉狩　麻
バスの発車の時間忘れて　灯
選挙戦大統領で巴里は湧き　澄
置引き抜取りさて御用心　麻
むささびの昼はもちろんぐっすりと　と
滝壷で酌むうまい水割り　澄
枯蔦のかくす表札月に訪ひ　灯
思ひひそめて病気見舞に　麻
それならばなんでそんなに口惜しいの　と
品川巻をぱりぱりと噛む　保
港未来颯爽として鼓笛隊　澄
迷子の猫は赤い首輪を　麻
散る花を背にかはせし竜馬像　と
ひきも確かに釣上ぐる鱒　灯

藤波を　原田千町　捌

藤波を渡り来るや江戸囃　千町
雀の子等の遊ぶ反り橋　みづゑ
春背広届きし箱の紐解きて　好敏
カウチポテトの後のコーヒー　栄子
赤銅の腕組む漢月仰ぐ　一恵
蘆火焚く娘の黒髪の艶　天留子
小重陽ダイヤ貰ひしことはるか　ゑ
突然止まる電気掃除機　恵
輸入税間接税はどうなるの　栄
動物園の河馬と居眠り　留
蓮葉の酒も酌みたしそよと風　町
雷避けのお札べたべた　留
お戯けが燃えてしまって絡み合ひ　敏
口ずさむのは愛と死の唄　町
曠野凍て受刑者の墓一列に　留
冬月に添ふ金星の燦　ゑ
母米寿我は還暦祝ひ膳　敏
シャガールばりで描く油絵　恵
薄墨の花山峡に咲きほこり　栄
耕す人に蝶のまつはる　敏

藤房の　中川哲　捌

藤房の波豊かなり神の庭　哲
雀も渡る朱の反橋　いさ子
紵糸をながくひきたるのどけさに　正江
話の合間しゃぶる飴玉　徒司
ハミングの「ジャントワママー」月涼し　美奈子
不倫の證し夏の手袋　江
背に強き視線残して走り去る　美
蹲の脇眠る嬰児　江
伝承にひかれて寄りし杣の軒　司
ぺったんこ靴ブランドで選る　江
シール貼り一気に登る大斜面　司
新雪けぶる倫敦の宿　い
君の名を聞きそびれたり日記書く　司
重ねてゆかし紫の女　い
望下り框ふたつを見送りて　江
立見の席に残る哀れ蚊　司
新酒呻る憎き税吏に老いの翳　哲
二と二を足して六にならぬか　司
花万朶乙女の頬の香に匂ふ　い
若鮎すくふ子らの歓声　美

藤棚や　本屋良子　捌

藤棚やかるがる渡る太鼓橋　良子
水の匂ひの春深き頃　正雄
ゐざり機紬織る音のどかにて　郁子
拾ひし猫のいつか居つきし　淳子
織月の簾に寄れば揺るる影　よしえ
縁台将棋のかっこよき男　淳
思ひゐて思はれてゐて結ばれず　雄
スペイン広場財布掏られて　淳
聖堂の尖塔鳩の憩ひをり　郁
心はづみてならす口笛　雄
竹馬も女に負ける新人類　淳
出稼ぎ守り友と搗く餅　え
コップ酒酌み交はす間に惹かれゆく　郁
忌の明けぬうち若作りせる　同
白雲をはなれしよりの月迅き　雄
海へ向ひて鳴くちっち蝉　淳
そぞろ寒読みえぬ駅の伝言板　え
一本道の家路たどりつ　雄
転変を幹に刻みて花万朶　郁
まもりしひとのこころあたたか　え

藤浪や　東　明雅　捌

藤浪や日和定まる休暇入り　房利
亀鳴く園に集ふ反橋　千雪
目借時だんだん遠き講座にて　達子
パソコンゲームの兄と弟　光子
満(ウ)月を銀河鉄道かすめゆく　達
盆の間は生物を断ち　利
つれ立ちてそっと抜けだす踊の輪　光
小町の恋を伝へたる井戸　利
藍染めの質屋の暖簾はたはたと　光
アルコホールの切れし欝病　明雅
久々に鷗外の書を出して読む(ナオ)　利
音なく積もる夜半の大雪　雪
湯殿山凍てし太古の夢の月　雅
野天風呂にて馴れそめし仲　雪
甘き香のマイルドセブン思ひ出に　達
疑ひもなくあすの米磨ぐ　光
夏来れば河童が馬をさらふ渕(ナウ)　利
竹垣の下蚯蚓8の字　達
長安の花見る事が願ひなり　雅
遠足の児の帽子紅白　光

藤浪の　式田和子　捌

藤波のゆれて天神祭かな　和子
羽音かすかに蜜したふ蜂　知佐
春障子児等あけたての切りもなし　志げ子
うちの飼猫どこにゐるやら　満子
末広の文字読み合ふ月の下(ウ)　弘次
浴衣の君に石鹸の香(ラン)　笑人
カルピスの模様にしのぶ恋模様　同
にせとも知らず買ふ呆け薬　志
団体は四国大橋寺巡り　満
鰤一本を釣った賑ひ　次
るんぺんに熱燗おでんおごり酒(ナオ)　人
門構へして琴教へます　満
溝板を踏んで停るMGM　志
いたづらな風ちらと太股　次
湖衣姫のメイク崩すか月に影　人
鵙に驚きはっと離れる　佐
古稀すぎて鳴く蚯蚓にも想ひあり(ナウ)　次
出入り植木屋法被色褪せ　満
遠山の花の浮き立つ夕まぐれ　佐
パンアメリカン越ゆる初虹　人

藤祭り正式俳諧　秋元正江

昨日の雨模様を一転しての快晴。藤祭りの藤は最高の見頃でした。白い日傘をすぼめて神の鈴を振る人の影が新緑の苑にゆらぎます。気温は初夏を思わせましたが、池の面を渡って吹きぬける風は心持よく、広重の浮世絵の画中に迷いこんだようです。

正式俳諧の会場は、始まる前の静けさにみちて、紋付、羽織袴の執筆は文台を前に端然と坐り、花司は、盆に紅牡丹をのせて膝前に、さながら牡丹の匂うような姿でした。

座見のあかりさんが席札、掟書、諸道具を確かめられたところで、知司の開会のことばとなり幕はきっておとされました。

座配の麻子さんは、宗匠明雅先生、脇宗匠杉亭先生、貴賓田中正博様を夫々席に御案内します。連衆一同も左右に着席。

席がしずまったところで小童(ちいさわらべ)子という役名の澄子さんの配硯です。重ね硯を捧げもって夫々の定めの場所に配られる姿は、胡蝶が音もなく舞うようでした。

亀戸天神正式俳諧の座席は、「御前掛り」で、床を背に執筆、向って右側に貴人、執筆の左に宗匠、脇宗匠、連衆は左右両側に居並びます。これは特に敬うべき貴紳、或は像、遺筆などのある場所での形です。

副知司啓世さんが宗匠に、準備が整った旨を告げますと、ついで献花となります。

花司久美子さんは、盆に牡丹、花器、鋏をのせて進み出で、座敷中央よりやや上座の位置で、活けられました。その鋏のかわいた音で一座の空気はぐんとひき緊められました。「執筆・執筆」と宗匠のお声が行渡ります。これに応じて執筆好敏さんは、おもむろに羽織の紐を解かれます。肩からするりと羽織を後へおとされ、座配がこれを畳みます。

硯、奉書、水引、文鎮の順に載せた文台「左澤」を持ち出した執筆は、中央に文台を置き、扇を前にして天神様のお軸に真の礼、次いで膝をずらし宗匠、脇宗匠、貴賓に行の礼、連衆に向かい、「御一同様」と礼をされて、扇を腰にさします。

このひと手ずつ進行してゆく執筆の動作によって、それは単なる儀式を超えて、茶の点前同様、室内の視線を一点に集中させ連衆も心の中で同じ動作を繰り返して、神への御供正式俳諧の共同製作者となってゆくのだと思います。形式にそいながら創造されてゆく世界、執筆はあたかも俳諧進行の魔術師のようでした。

越天楽の奏楽がながれ、緩急よろしきを得た文台捌きもあざやかに、左膝を立てた歌膝で句待ちの形となります。

下俳諧の説明ののち、「花前」の声に副知司淳子さんが「匂いの花」を宗匠に乞いに進み出ます。光源氏のような出で立ちの若い祭員南原一隆様が宗匠に玉串を渡され、宗匠は神前に二礼、二拍手、一礼で捧げられました。

端作りの紅白の水引きの扱いもきわだって、歌膝の吟声、文台返しも滞りなくすみ天神像に懐紙をのせた文台を膝行で供え、ここに奉納が無事終了いたしました。

ひき続き第二十五回猫蓑会が新人を加え八席にわかれて二十韻を巻き、捌きの披講が終ったのが五時三〇分でした。

和子さんにはいつも乍ら、羽織、袴、和服の着付け一切をお願いして、帯をきゅっと締めてポンと叩いたり、殿方の御着付けもさすがです。執筆は前日の雨で、テニスに行かれず、家籠りをなされたのが幸いであったと云われ、雨と晴の天候に感謝しました。貴賓、田中正博様の終始凛とした立居振舞に形の美しさの重要さを改めて教えられた思いです。

天明らけき五のとし、六月三日より九日までの七日の内、つらね歌の片歌一句、和歌一首日々つらねて、天満宮の宇津の広前に雨を祈りて、百姓のために心をこめてふかくねぎごとをいのりて七日みちぬ、しかはあれど祈のうちに折々雨はふりければ、しばらくもふらざりければ、

九日の夕べかくなんいひあげける

心にいのる神はあるかは

となん連歌のしもをいひあげて九日より十一日まで三日いのる十一日の暁の夢につけてかくなん

あめつちのやはらぐ光あらはれて

夢うちさめて近辺の人々にもかくとかたりぬ、時のまに雨いたくふりいでて、百姓の歓やつがれもいのりしかひありてなをひたすら此神の恵をあふくのみ、穴賢々々、

右は亀井戸の社より出候書付の写なり、

天明五年六月祈雨和歌奉納

「亀戸天満宮資料集より」

筑波連句会

昭和六十三年四月十日
於　筑波大学人文社会研究科棟八階

二十韻　新治の　下鉢清子　捌

新治の初蝶小さく生まれけり　清子
　ほのと霞みて山の紫　千町
春袷爪びく箏の音も妙に　明雅
　ソース煎餅ポリポリと噛む　秋景
八階にたどりつきたる汗の月　弥生
　落書ばかりのこる立て看　冬乃
自主休講ふたりっきりになりたくて　妙子
　脱ぎたる胸のほくろ見らるる　雅乃
摩周湖の女神に捧げワイン飲み　雅
　鳥獣虫魚みんな友達　町
雪眼鏡あとあざやかに子の戻り　景
　お前エイズかそれじゃバイバイ　K
バイロンやハイネを種にナンパして　町
　夢の終りは秋の停車場　生
人間の悲喜知らぬごと月は澄み　雅
　柿の膾に手ひねりの皿　妙
ハイティーンタレント局長笑顔撒き　同
　土地の訛の出るも愛嬌　景
数々の曼陀羅に会ひ花の旅　町
　バスの窓から逃水が見ゆ　乃

二十韻　ゆく春　秋元正江　捌

ゆく春の奥踏みゆくや嬢歌の地　正江
　杣みちの石憩ふ双蝶　K
キャンパスの句会開きののどらかに　郁子
　厚目に切りし抹茶カステラ　久奈
大橋にのっと顔出す夏の月　八重子
　酸漿市へつづくどぶ板　庸子
年下の少年つかのま美しき　江
　苦労して読む「ベネツィアに死す」　K
待望の新築祝ふ金粉酒　庸
　盲の犬も欠伸して立つ　K
冬霞旗を飾りて遊覧船　八
　逆さ富士さし子等の呼ぶ声　郁
宗祇忌の箱根の出湯に身をひたし　明
　待人遅し漸寒の恋　雅
残月に騙し騙され啜り泣く　郁
　ところかまはず禁煙の札　奈
東西の壁もいつしか崩れきて　同
　猫車押し卵売る人　K
招かれてお重ひろげる花の下　八
　水面たたきはねる若鮎　郁
　　庸

渋谷連句会

二十韻　雪月花

豊田好敏　捌

月待たむ花たわませて積みし雪　和子
脱いで揃へる春の手袋　哲
荒磯より乗っ込み知らず便きて　好
チャイムが鳴れば一番に猫　敏
次々にSPレコード巴里祭　美奈子
「夏痩したね」なんてやさしく　和
深酒が言はす言葉と知りつつも　美
列島つなぐ鉄の幹線　哲
虎彦の足摺岬望くだり　敏
ひとつふたつと数ふ数珠玉　哲
秋高の相場に賭ける若大将　和
ビッグエッグに響く歓声　敏
待ち合せファックス流す時代です　和
箱屋泣かせる姐さんの術　恭子
ほつれ毛に行きずりの愛冬の影　和
庇をたゝく霰寒々　恭
竿売りは去年と同じ爺さまで　美
すすめてはみる皿のピザパイ　哲
濃やかに咲いて深山の八重しだれ　同
夢の中まで蝶と戯れ　敏
昭和六十三年四月十一日　恭
於　渋谷連句会

逗子連句会

二十韻　沈丁の香

本屋良子　捌

沈丁の香をいとほしむ谷戸住ひ　道子
皿にほっこり鶯の餅　杉亭
春暖を背に受けたる子等のゐて　弘次
競りの市場に犬を追ひつつ　好敏
北に行く列車の止まり月涼し　亭
乳房の揺れる羅の女　道
今の世に業平気取り醤油顔　敏
会社をサボリドラクエを買ふ　良
膝しびれやっとの思ひどっこいしょ　次
いい湯いい味甲州の宿　亭
磨崖仏ふところに入れ山眠る　道
雪の女郎に誘ひ込まれて　亭
わたし好き裏の裏まで知る彼氏　次
萩の繁みで語り合ふ影　良
月明り窃盗団は外人で　敏
粗朶にかかりし落鮒を捕り　次
独酌も気ままなものよ定年後　亭
叙勲の宴は学士会館　敏
花の庭陣取る声も賑やかに　良
肩にとまりし黄蝶一匹　次
昭和六十二年二月十九日
於　本屋宅

『冬の日』の「まゆかき」

佐藤廣幸

わがいのりあけがたの星孕むべく　荷兮
けふはいもとのまゆかきにゆき　野水

「狂句こがらしの」の巻、名残の裏の付合である。この野水の「まゆかき」は古注から現代の注釈書にいたるまで、すべてが「眉書き」「眉描き」即ち眉作り、置眉のこととして解釈している。この解釈では野水の付句が前句にどう付くのか、私にははっきりわからず、何かもの足りなさを感じてきた。それが天地庵素丸の『的伝冬の日註解抄』の注を見ると実にすーっと頭に入って来る。素丸は他の注釈とは全く違った次の様な解をしている。「懐胎すればまゆを剃。是をまゆかきとて悦ぶや。但し親類のもの剃也。うへのかたさまにてなを御祝ゐ有事也」。これでみると「まゆかき」は「眉掻き」即ち眉剃りのことである。我が国の習俗では、眉作りとお歯黒は相関関係があって、近世も中頃になると、女性は結婚と同時にお歯黒をつける「半元服」を行い、続いて妊娠すると「本元服」といって眉を剃り落す風習があった。（『日本風俗史事典』）この事実を照合すると、『冬の日』の「まゆかき」は、素丸の註解が当っているような気がする。即ち暁の明星が胎内に入り、貴子を産むように祈っていた願いが叶って、妹が懐妊したので、その眉剃りに今日妹のところへ行くという意になる。句の表には姉は出ていないが、句の主役はその姉であることは明白である。そうすると、野水の付句は、前句の「孕む」に対し「まゆかき」と応じた心付（句意付）になる。この歌仙のできた貞享初期の他流試合では、芭蕉もこうした心付を深くとがめなかったのであろう。眉剃りは、素丸の言う通り、親類縁者の、しかも年長者に剃って貰うというしきたりであったようで、この付句のように姉やおばなどが当るのが一般であったのであろう。

先号に投稿募集したところ、早速、奈良県斑鳩町の佐藤廣幸氏から、右のような新見を含んだ玉稿を頂戴して有難かった。佐藤氏は古俳諧の隠れたる研究家で、七部集を精読しておられ、十年ほど前、私が信州で「墾道」という俳諧研究誌を出した折も、しばしば貴重な文章をいただいて掲載したことがあった。同氏に深く感謝するとともに、外の方も積極的に御投稿下さるよう、お願い致す次第である。（雅）

【恋句曼陀羅】　定価　三千円　小出きよみ　著
390 松本市筑摩東二四一九番地
現代恋句の粋を集めた、連句人必読の書。
残部僅少。

連句会案内

※連句教室
日　時　第一日曜日　午後一時～五時
会　場　関口芭蕉庵
文京区関口二ノ一一ノ三
（電）九四一－一一四五

※柏連句会
日　時　第二日曜日　午後一時～五時
会　場　光ケ丘近隣センター
（南柏駅よりバス　光ケ丘団地マーケット下車）

※A・C・C連句・理論と実作
日　時　第二・四水曜　午後一時～三時
会　場　新宿住友ビル四十八階
朝日カルチャーセンター
（電）三四四－一九四一（代表）

※猫蓑会（会員制）年四回
（一月・四月・七月・十月　第三水曜日）
会　場　松声閣
文京区新江戸川公園内
（電）九四一－九六四九

〈御注意〉
柏連句会は、従来第三日曜に興行していましたが、六月から第二日曜に変更致します。

雁帛往来

▽四月十日。筑波連句会発足。当日、筑波大学教授加藤慶二先生の御案内で筑波神社に参詣。嬬歌の場、男女川源流を見て筑波大学構内の会場へ。二十韻二巻満尾して五時ごろ散会した。同会の今後の発展を期待している。

▽四月十七日。柏市光ケ丘近隣センターで、正式俳諧の予行演習をする。役員全員出席。執筆役の豊田さんはよく勉強しておられ、堂々とした挙措は天晴で、藤祭りの成功を占うものとして、一同大満足であった。終ったあと、式当日の下俳諧を裏の折端まで作り、五時散会した。

▽四月二十八日。国民文化祭というのが一昨年から挙行されるようになり、六十三年度は兵庫、次は埼玉、愛媛と続き、六十六年度が千葉の順になっている。連句は愛媛では独立した一部門として参加することに成功した由、松山の鈴木春山洞氏より連絡・激励があったので、市川在住の今泉宇涯氏と相談し、この日、同行して千葉県庁に企画部文化国際課を訪い、課長の大塚英子氏、主査の斉藤剛氏に会い、千葉県としても、連句を独立した部門として取り上げて貰うよう陳情した。

▽四月三十日。亀戸天神藤祭り奉納正式俳諧は好天に恵まれ、無事終了した。関係の役員の方々、ことに天神社の方々の御好意と御配慮に心から感謝する。

▽A・C・Cでは恒例により、斯道熱心の故をもって、蕉風伊勢派の伝道書を、桜井天留子氏に贈った。

季刊「連句」　第二十一号
昭和六十三年六月一日発行
編集人　東　明雅
発行人
季刊「連句」発行所
〒277 柏市つくしが丘一ノ二ノ一二　東方
電話　〇四七一（七五）一一九二
振替口座　東京七－五二一三三
印刷所　㈲岩田印刷所
〒277 柏市豊住一ノ一ノ一二
電話　〇四七一（七四）〇一八三
定価　一部　五〇〇円　送共
一年　二〇〇〇円　送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

連句の実作・鑑賞・研究に必須の知識をすべて網羅！初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

再版　B6判　三五二頁　三五〇〇円

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである

収録項目例

〈用語篇〉挙句　会釈　一座一句　有心　打越　思いなし　表八句　懐紙　歌仙　軽み　切字　景気　五句目　差合　去　式目　四春八木

〈人名篇〉天野雨山　伊藤松宇　上田聴秋　鵜沢四丁　小林見外　下平可都三　関為山　高橋玄一郎　高浜虚子　中村俊定　野村牛耳

水原秋桜子編

俳句鑑賞辞典　二三〇〇円

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編

現代俳句鑑賞辞典　二八〇〇円

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編

季語辞典　二八〇〇円

日本の季節にまつわる言葉をスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修

難解季語辞典　四五〇〇円

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典　国語学会編　B5　一九〇〇円

国語慣用句大辞典　白石大二編　A5　六八〇〇円

国語慣用句辞典　白石大二編　B6　二二〇〇円

国語史辞典　林巨樹他編　B6　三五〇〇円

日本語語源辞典　堀井令以知編　B6　一八〇〇円

京都語辞典　井之口・堀井編　B6　一八〇〇円

擬音語擬態語辞典　天沼寧編　B6　三五〇〇円

隠語辞典　樣垣実編　B6　三八〇〇円

近世上方語辞典　前田勇編　A5　一五〇〇円

花柳風俗語辞典　藤井崇哲編　B6　二三〇〇円

明治大正新語俗語辞典　樺島忠夫他編　B6　三八〇〇円

難訓辞典　中山泰昌編　B6　三二〇〇円

名乗辞典　荒木良造編　B6　二八〇〇円

名数数詞辞典　森睦彦編　B6　四五〇〇円

あいさつ語辞典　奥山益朗編　B6　二八〇〇円

新版ことば遊び辞典　鈴木棠三編　B6　五八〇〇円

類語辞典　鈴木・広田編　B6　二八〇〇円

類義語辞典　徳川・宮島編　B6　二三〇〇円

表現類語辞典　藤原与一他編　B6　四八〇〇円

新版文章表現辞典　神鳥・村松編　B6　二九〇〇円

東京堂出版　101東京都千代田区神田錦町3-7　電話03—233—3741～2